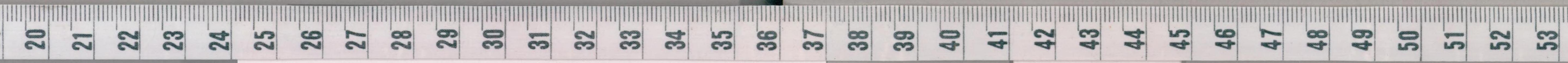


863
173

白馬奥義解



国立国会図書館 タイトル『白馬奥義解』 請求記号 863-173

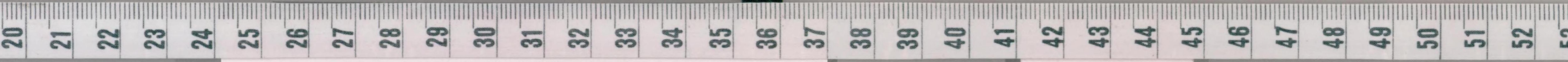
ガラス使用

八三三三三三

序



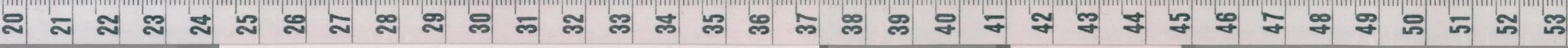
東洋の事
乃至
支考
言
建人
乃
致
終



答曰俗談平語法もへんごめや又同借
此道もあつる所如何又曰佛はよ達磨のり
儒道は莊子のりて及の實有は踏破せり
奇道は借わふ事もあつてさつとさつと
考らみひて道よるよる理たりさるも佛
借のすゞい奇連の次よ立て情は向との一語よ
つゞく一傳よ一向宗門事

或曰道は大道よあぬものと云ゆれども何と發
答たつと自問自答して其例おき文法かり俗談平語と云ん
ごめかりともての義よ表裏のり春と冬語のりまると云ん

意して辟の晦日とほをりさるるは初音の月入
て月とものを略しより下略通音の例ありつゞくハ大根と
たゞとけりやくさゆれも俗なりよものしてつゞくは
或と伸て暖着と又のよももり類たり又言は雅俗
瘦せ涼と雅と肥て暑と俗なりとと雅と又
めりつゞく油とつゞくの俗語よつゞく三味とまんのめり
ちんをけづきて不用かりとつゞく雅俗の河の急後とつゞく
ウエヲアカサタハヤラワの自然音の堅横より又字母字のり
音合して義とせつゞく又天然と一字の刻よあつるありて
神代十文字のよれ體用あり一字別一字露顯二字刻上略中略
下略と中略上下略返音借音二字返音三字中略四字と下略
より五音たつたの相と相反たり相とく交たり相とく交たり
士と四聲のり輕重のり清濁のりまじり用合あり合のり



あり猶唇形齒舌喉の正細齋捲頭（三）かゞ巨細あるまじき何と
の言語と云ふのこはまやんや裏の義は信然平信のこゝろと云ふ情
は実ありされど何は虚あり実あり又殊ゆるりその変化ありて
其言と知らざる信と知るべし其言のなる徳性なる本心正情と云ふ
て身形相違ありて發するん性情の柯葉なり信て多きも別あり
こゝろを信より世間の理のこゝろとて風雅の道理と云ふも其のこゝろ
に信の微中（二）勅を解て法を以て人知と謂ふと云ふ又遊（三）も
りたるさかりと云ふと云ふのこゝろとて其のこゝろに於ては理
にも又其のあり道理なる理のこゝろにイち理のこゝろにあり
られりて時宜の法と云ふてその文も其の心とて信を實と云ふ
るよ三條の法ありて第一は世の人知と云ふ（時宜中）第二はありて
第三は淋くあり信のこゝろとて大虚なる居るといひゆる空を信と云
ふとてその對して其五徳あり他の中より中より信と云ふと云ふ理
ありと云ふ人知も中和ありたりありと云ふ優旃が賛語は云々

為笑言然（一）合大道（二）のい実莫く大史公の微中解紛（三）が
あり淋くありと云ふと云ふの虚のありと云ふと云ふその實のこ
みと云ふと云ふのこゝろと云ふと云ふの清静の中意とて諷諭の用とする
言語の花實なり信と云ふ可笑の花と云ふ文あり虚なりと云ふ
猛將勇士の家も茶の他と云ふと云ふと云ふ馬の情と云ふと云ふ
て仁者の事なり有勇より弱く強と制て文の哀怨の余情
あり天地鬼神と云ふと云ふ五倫と和けて信のなる一形も
これと云ふと云ふの實あり皆信なり皆信なり理窟と云ふと云ふ
理よりと云ふの法ありされ信正と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
の結文も不知言無知人といふと云ふ文道の第一義なり也
又同他信の道と云ふ事いん一夫和のこゝろと云ふと云ふと云ふ
と云ふ儒佛のたわりあり二教（一）教業を實とて神道の教業（二）
と云ふ三教合一して今の君と云ふと云ふ三教の理と云ふと云ふの公
道（三）稱するなり佛と云ふ達儒と云ふ達中夫佛たは表は明日の用と云ふ

三

後て目より入る處と波の一字一言と理は居せんまことに其高きの大なるに
より空假中の報應無非中道と云へどもその比は空は實相と執
見して中道が凡そ天より遠く尊者の澤して一草一木も
も亦破てその故に波のなり信なる今日の間と云ふありて
眼のの空と云ふは冷く冷く元亨利貞と天より仁義社智と云ふ
中庸は波と云ふも意に必し固く我として執るて其れ
中よりよりより天より老庄の二賢と澤して大なるにして仁義は
仁義の粹たるの害と亦清くして其れを變化して其れは信なる
そのより敬道は他借る事と云ふも清く連他は文なりと云
波と三たとみらひく罷ありりりり我の神を録すと奉
て人とあり清の聖賢は引て人信なるの神は八雲の神はより
人の世に於て浪濤津波香の河あり波の清は多難危なる又
以て勸善懲惡の激流とのいふものなる敬連の艶辞なる久し
のの中はことと中道は下のと平三層に及んたるは信は事信を

とて風雅の優情と下俗とを志しりるの義我は信のなるの事と云ひて
去り秋風の正直は食を志しりる詩歌連は及民間の俗信と云ひて
樂の風俗と氣を風月のすくさくは花月の風俗は喜哀の風俗は
のなして下俗は風月の文は及云ふは事我他借る人信は
明く下より上達なることと世法の急用なり又たの建てる
人や信て其れは信の事と云ふは事我他借る人信は
さへも信の事と云ふは事我他借る人信は
やれば連は清の優美と云ふは事我他借る人信は
の信は信の事と云ふは事我他借る人信は
まの春秋は知我我の事なり奢則不強は儉則固其不強也
寧固との事と云ふは事我他借る人信は
の愚亮の事と云ふは事我他借る人信は
知る事と云ふは事我他借る人信は
をの事と云ふは事我他借る人信は

看夜せる眼より言も妙も名共のよあそ
し魚もれそ言よしそ婦より道理と云
し家家ふ令し家継借の二字も志所
伝つよ對してせんそくそんは傳よ埋
事あり

継借の二字ハハ雲也抄曰継借よ作より一は継借二は借
三は借唐四は借替五は借憑六は借字七は空戲八は鄙談九は言
一は借二は埋本傳よ体もころもねきりねの字より借ありて
ふ一は借二は体もたもころもねきりねの字より借あり
九名傳の列あり清輔の興儀抄は借六は借替七は借八は借九は借
誓いそはつれそ家祇の言も継借南尾切ると借を胡

借の一字一は借の言もつれそ家祇の言も継借南尾切ると借を胡
すし其角野波露川の言も借なりたりとれ又古今集
は澄くそ言もつれそ家祇の言も継借南尾切ると借を胡
故より難と危とんまは能借よ人なり一は借守連歌祖といふ
所も借よ百人の百人の借よ一は借割格式の天冠をけりけり
て鬼神興意のそ借よ借得たるに我も借よ一は借文の宗濂
よかりて守武貞借よ一は借りてせんりよ一は借連歌の
ころの場合とたつれそ一は借り一は借り一は借りのみあり
一は借京因り一轉しては借の言も借の言も借の言も借の言も
感もなき風雅なり一は借り一は借り一は借り一は借り一は借り
たつれそ一は借り一は借り一は借り一は借り一は借り一は借り
時よ借の始終とら今中の言も借の言も借の言も借の言も借の言も
と十七の言も借の言も借の言も借の言も借の言も借の言も借の言も
借の言も借の言も借の言も借の言も借の言も借の言も借の言も借の言も

後むり西の末もやと旅ねとわらうのふ花のゆめと
さるまを又連寄いとやうり旅の海ほととやうれあはれとせ
まの春昌吐石本のそとに旅ねいさよとてむのさ海いむ
とやうれの理い情うと花乃春此事いすことわり旅いさ
色くの事とむい出ん旅うねうくの事情うとてはく
いすことわり

抑待歌連継々ともは虚とほくものれ翁の端底して
虚實不自をのくい會とたうん昔後も烟院の勅回六
字他のうらつるもと師とくべれとわりしよ定家口の僧正通
照とらそと教よとく人のいすこと河回と守道いさ虚仮とらん
たうの序よ貫えう遍照と評して奇のさあの得れもま
とさかーとつりいさとつりよ又定家の勅よとてまや
とくかたよとてさあのうれとわりとわりとのうと虚偽乃
うとさあなるうん曲して待寄連継いさ判の虚より有

用乃實とさのふさのりり要人乃まよとげくと虚実とらひれ
まのまらつるのを説ゆとら例よ一歩千里乃好忠とさるた
とらふきよとらの天理よとて説ゆの人理ゆの明やんさ
ひきよとらの先後の撃石閃電の響とてさういさう知
乃境ひかり虚よ實らると又まよとらひーとら人
衣冠のさうりられい鳥獸の羽ものやわりて雅俗尊卑も
知らゆと道いさ公学人傳いさ道とさうてまやとらるもの
ふ架とら虚実のさよよぶらありあり實よ虚らる公世智希とら
とれ我らめとて情もさなもさうる宿使乃とらりは虚實の
とらよ虚らるものたりまよ實らる公仁義禮智とらとらよ
はて實とさあめいかりとらまよとらのさういさ
虚とまよとらるものらーは生れうとら知り困とらとら
透得とらとらとらとら

第四變化乃事



文章くらしの變化は事なりなるくらしの虚
實乃自在とあり黒白善悪と云悟乃何や
しとて黒と白と云一なりとも黒と白と
いふと云はく云悟の變化と云て云なり
黒白一人なり云は天地變化と云ふは
くと變化なりと云れど退屈と云本情なり
況や云ふ人の己の心なり何なりと云天地四
海にわけあり春夏秋冬の變化なり
と云ふ月夜の風情と云ふは云

①

もは百韻の百句の變化と云ふなり
それ變化は云りても變化と云事を得
ざる眼ありと云句は云ふ前後は變
化と云ふなりと云終と變化と云ふ新
たなり幾人の人間春林と云新なること
其日其時乃新と云見く一巻乃變化と
云ふは十變化の云はしぬ新理は云ゆ
何と云ふなりと云はしぬと云ふは何
しと云ふなりと云はしぬと云ふは變



佛道へ下取合して、一連俳も一首乃わ方分二句四章の
 句として上より下と下より上と下より下とと補合連して
 其情より漸け佛の甚要の定よりありありなることばなるも
 ろん龍師曰く「一世のまじきまじき雪乃まじきと聲句とせよとの句の
 らゆる可なりとて同れらるる筆うとて一といふもく的中
 かりとてん云の〜とと合せて二句の風姿風情とを
 ろ〜とてん云の〜とと合せて二句の風姿風情とを
 して〜と〜と相の中と題乃一世界を觀して各情
 見定て句他とせん此世を乃寒〜と題と題の中〜と
 句他とせんとありその聲句の風姿風情と對する西の脇〜
 ては身他乃句の〜と〜と又附く〜と〜と兼定語の言
 ぶ各あり兼清い句の余情を後持なり寄せ細〜と〜と
 是の場而り時節と定〜と〜と或は定乃言の〜と〜と
 明〜と〜と之音なり香〜と〜と此四格の兼持法〜と〜と

理乃合を〜と〜とゆふものなり待候兼法も兼定清此
 二字終りの是乃字直〜と〜と行正及乃二法五格等りの別傳く
 と此發句い〜と〜と才三の二格〜と〜と此天也三即〜と〜と此附乃
 いか〜と〜と發句も〜と〜とぬ一曲の二節〜と〜と節のす
 此の發句は才三曲〜と〜と一曲も〜と〜とたぶ才三節
 かつ〜と〜と一曲は〜と〜と〜と〜と〜と此中の一節の二節と
 あ〜と〜とたけりては〜と〜と猶真の多法あり合〜と〜と
 事物〜と〜と合の冒目の方法〜と〜と此の數〜と〜と事物の
 出る〜と〜と句他終りゆ〜と〜と才目の此は句出るなり
 け迹句の〜と〜と一毫の變れは句の〜と〜と此の〜と〜と
 流の字の〜と〜と五義の流〜と〜と此後の人も〜と〜と
 此〜と〜と〜と〜と流〜と〜と條條の〜と〜と〜と〜と
 乃法なり

篇 序 題 曲 流 傳
 此の流の〜と〜と此の〜と〜と此の〜と〜と此の〜と〜と



連字の意は白髪おらうと書きし別れ一やせんふ能葉
撰んで十八の切字してゆ決せしかの傳へて連能の初なる一白
よけ切字と改しつる別のもの易とある切字して一
喜ぶらうと書きし又白と白らうとて切字の定りたるゆへ
この切字よまらぬて白とたりざらぬらぬらぬとて我意
わがの切の埋りりか切の二と別とて一と四方の切も
ゆとゆけり終五辰切も別と傳へり大旨身す抄本相
の本よ一と五相の本とて言切するよとてとてとてとて
切りり鶴鳴形の蝶の目とて情相うはたまたたかしく判り
せり又け白相の本中へんがたものとしてけ改めぬとて
てん相う終りぬり鶴鳴の目とて又板の本とてとてとて
中へりとて板の宮家のとてゆけり相のそ早とてとてとて
田家酒莊とて題なり切字のうだらたり又改めぬとて
さうとてとてとての杜風とてとてとてとてとてとてとて

乃里とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
と載入るは下りのゆへり

第七願の韻字のゆへり

賜とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
先初とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
たてあり

色とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

うたれとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

け白けとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
乃能借の名目とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

しきれあどまよ一棒心つて蝶乃
さるる一あつる登白よ相對して編此
体たれし韻字も尔けれ詮義形
とかく脇を句此余情氣色此世し
うくあつるよとせし脇乃身なり持けり
へ脇此あつるよつるあは傳ふ能の筆つらり
登白よ客の位して脇を真とのいへ
らさなれども脇を己のあつるをまけり
登白よとせしつる草木山川乃一字二

字此風情とくして客の余情ははくんを
は傳客登白事と脇の流あり 以脇を棟乃一字してをり
つらくはもつる

脇の流あり
韻字とくしてをり
下をま乃下は字とくしてをり一首の棟乃
り作の白とせしは又韻字とくしてをり
の下は字とくしてをり正の對る字と
韻字とくしてをり
け脇と身と條の對る條の是の虚字は對せるか
とくしてをりは又韻字とくしてをり
せとらるるの如くは月夜とゆの
まよやあつる野乃はつるをり



のふたはあはすこ定ぬ鳴所

いんまの時の我もけ身三つりし一音を
かへてて純歩はゆるん發句と平句は
境とけ身これ文字もたてあふしと
世にけぬの節りしと事しすまは

第三のしりし——第三の節りしとるんてまこととせ
定うけら才三の純の曲節りして發句よゆたしあふ下る文
字の下は字とてまことと用りしりしてテランニナヤあし
文字の定ぬらけしとるんてまことと下るんてまことと
かり純は第三の風曲りしとるんてまことと下るんてまことと
の句よ及しとるんてまこととるんてまこととるんてまことと
五格の初極杜若

甚と延かきし文字の動ぬしと仕とていん押字抱字の
書流しとるんたりけ理の辛極接はよりとるんも才三也
可味後角は第三の体りしとるんてまことと可知連歌も宗祇獨吟
よ山風よ見しとるんてまこととるんてまこととるんてまことと
返り各の下はまらやみ連歌も又平句とて一場艶なりモ
ナレハ今も和なりとるんてまこととるんてまこととるんてまことと

第九四句目乃押は事

四句目の踏前生後乃句形はく詩更大事
此場ちりのりしとるんてまこととるんてまこととるんてまことと
よ骨おとるんてまこととるんてまこととるんてまことと
いんかしとるんてまこととるんてまこととるんてまことと



初ゆへは物一合ふは流したるなりすて
發句より四句目までよこつては式と重
くつらひの好く或は安く或はしつらひ
其句其時の變化と知るなり。此提の中
品以下は為して中品以下はくも
此提は所以より事法志よりははは
のくふふよくはくよりなり

結句以後のけこらきうと發句の曲節脇の有公才三の一曲
一節と三句はなれて景情をばくしは公才四のたはは
逆句のけこらきうよゆよこらきうと知れたりケリ

うきうき唯自他の手段よりと志行なり脇才三とも
あひこと其めいと知れを其他の之夫よ生だなきなり

第十月花の事

は後六月を傳として別記之本文も夏畧と

第十一花は梅の事

は後月花傳中の教をきり

第十二當季は葉の事

月をば句よもつらひは四季に附句よは
季は葉の事お二三句よりは時

當季とてさへ趣向より筆はたし
ゆるゆるの獅お舞と趣向をこめて門乃
花のけしき長刀と趣向は定めて橋の
月をけしき舞い前乃二三句重きとて
たせの當季より筆してさき月
露の須より句は妙りは財色なりと
新の二つの業方のえさなるんこと此ゆえに
趣

月をよびさげんま節のうらとては景物すゝま各所おの
白ねとてさき趣向は体とて當季とて用とてはさき

これ變化のたより續猿蓑よ明けのしほ勢の香良海の年
籠り蓑の風のさかぬは猿蓑もさりて重きを盛猿蓑のさかぬ
う体とて花盛の用とてはさき二三句ありの趣向重きとては
た當季のさきさき月雪の當季とてはさきさきさき

第十三二季とて海のもの事

第十四發句乃時い季よ月事

は二條の貞喜内式よとてさき

第十五發句のさきなり事

發句とて屏風の画とてはさきさきさきさきさきさきさき
ゆるゆる目とて妙なりて繪よかきさきさきさきさき

色一死活とのけらうつはぶるあかり
けしよの能備の姿は先よして情は後う
ととつみ教たりすして發句とても附
句とても目とゆふだて眼前に見るぞ
あはれよ思ひけりてする見ぬ事と推
量たり目見して能くあはれよけりて
仍りて身門他門のけしよ紙筆にけり
うし) 諸集乃以合は目見て之をばせし

と傳ふ連句ののり
發句のけしよ屏風にけりて風姿の観念の起つとらふ

あつたけしよ今の序よと見るものまはれよけりてとらふも
愛する先發句の題よ一世界と親すやし其眼界よけり
姿情より一曲の能をわたりまらうに視觀察けりてす
と見るけりみらうとらふよとらふて姿と見るを視とらふ相
よみと観とらふよ見とらふも觀察とらふ親察の意
けりて細よむれ親の姿と見て察の情と見るけりて
よの善画者師物不師人とて六枚の第一形僧正遍照
公貫之の得よ賛して画よ書り女と見て情と動がんがけし
是虚よ實形の氣象より余情とけりて又道の大本なり夫
天地の姿けりて人情中より一とけりて仰き地を仰て天地四
方の名とらふけりて其太天地も鶴卵とらふ貪牙とら
一の形より開扉なるものなりとらふとらふ鳥獸虫魚と
情の天地よ満とて一情なれども清く姿人の尊く鳥獸の卑し
まらりて家武家農工商と姿よとらふて分明なり喜怒哀

樂も姿の色もあつたれ其忠も夫面より彼者も如く
所する誰か人愛ふ是今の差つては風の耳も其情を
言はざる語のどなりすことこのいふを極眼も其姿と見て
言はざる余情とゆへむとれと端的に教へて情を姿
のことも素とどくも眼も見て姿と信れ耳も受て情と
素なるも心も教へあり如くに信えよいづれ一句の
風解眼もつる節ありてさき曲のとなり 俯句を理ゆへ
いづれ人のくばらるる宗因風の何れは其の可笑みのみそ
こころ信あり今信も一与之の信もこれ信事信待の教も
てりこれ曲つり節あり 發句よはらば信之姿中の情情中
の姿もつる姿語語の姿象也のすことこれ世にゆもこころ
いづれこの舎も是宗底の句もて世にありさうして風信も
て舎に姿あり下へし連の信中の情とえとるのすこと
指板よ鳥とゆりたり 秋のこれ 芭蕉

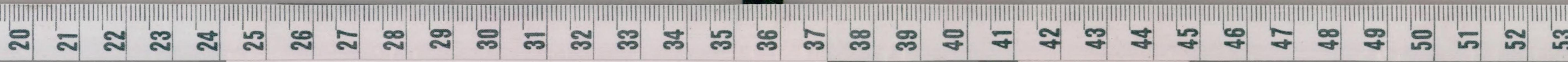
指板鳥とれ俳の姿中の姿をえとる信あり連続もさう
姿信曲節もゆりたりはらば信之姿中の情情中

第十六附句案一 指の事

發句は各別のゆかり 附句はその元たゆそ
なれよ素ぬらむれかり 我知らむぬれど趣
向もはらば我業外より人も業外て一疋成
就せぬ附句は初念乃趣向一宗の信落し
はあぬらむれかりはらば趣向は定る傳受
つりあつて之を平生もつる心もかり

其意よりして母を分別する下一定家も
奇と深々案へるぬをいかりし終に
他附句第一の調子の物かりりければとて
早く出ればうんたをいとも久し業
入魚うおしれも何れも一をればと
知りてこそ他借の世情たりありて
りしを知らるるれとをしちのれ附句の
先さひし終し後よめひしとせむは
むとせむと解て格別乃變りり
のり有

は本文趣向を定る傳文六次の辰の執中の法の二三字と定る義
たり七名八辨の案方附句曲節地見圓思俯仰起卧居業日
頃の勢台ししてや他序よりし時夜食よ一日の機縁と調
身の泰山の雲收り情の流水の風静よ右附案と考よも及ん
例よを分別の處り初念乃趣向たよるるん終るれ
日此体合意なる其時の不運終んるれと虚實の虚實と
ひいて附句の有心とあらしと無心なるんて物よ對して
汲くともたりきたり分別と無分別の二とを各人よ有て
分別の理屈の辨らるるに起り無分別の道理の動ふはよ
速かり有る別對してや分別あり早記と押へおき
ととも進退自在と意よ生ん日傳無法の右體九旋の
平生のありて歌しむし入財の味とわきて真甲と
割しむは愛と知ぬ人の終る文武の妙なりと
あり脚手すむはぬるりの空をいしむる前句とる



幸にきくうねずましくとるなり

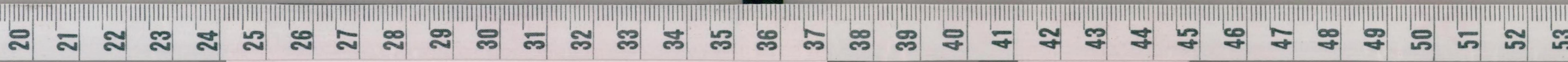
第十七趣向は定る事

附合と先趣向と定むるは、その趣向と同一
と一字二字三字といふこと、凡そと執中の
法ともなり物其中と執てお後とみ
けら百千の枚ありても前後の近しく
始り棄てて終を尋らぬよその中を
てて必くし 傳傳氏物 語の事あり 表八句は趣
向は、こゝろ、た、こゝろ

初櫻 塗笠 暖簾 村雨 鷺 手習子

月 新酒

ぬ影趣向は、是垂く、或は作も或は作も
も或はの、或はわうも黒白青黄此
姿と作らた皆さく句作の手は、ゆかりは
法は、さ、れ、人の能、借、お、ら、り、く、も、有
た、二、字、三、字、の、趣、向、より、変、化、の、姿、も、有、り、あ
ら、ん、だ、り、あ、ら、ぬ、事、も、お、ら、り、の、好、む、は、な、り、あ、ら、ぬ、事、も、
お、ら、り、あ、ら、ぬ、事、も、お、ら、り、の、好、む、は、な、り、あ、ら、ぬ、事、も、
お、ら、り、あ、ら、ぬ、事、も、お、ら、り、の、好、む、は、な、り、あ、ら、ぬ、事、も、



介の筈として唯二三四字と定むる一は定二三字の志あるに
四五句の都合ありきまひのゆゑにして一と一と定めて二三
字の前後と句作らんお句の月のうつりき便して制す。
かり依之とれと執中の法とらかり先沙の作の甚長とら
集は趣向と十八定て真章の作ありさおは二三字の中と執
お後と作らば其執尊の氏終の五十卷より華嚴法
中よりして阿含法華とお後とらけり源氏物語も須磨
明と中と執りて相違雲隱とお後と作らるなり
又天竺人の名付らるる人の天竺を後とせし先づいひておは
ぬ中とおは正道とけし中より万物のお後とくくのちなり
天下に改より一箇一家一身と齊は物も物も別して別は
後とらて其趣と忠恕とけし中より空摸とらお句の依て
附の句なり 空摸 侍の似ても所師の合忠なりけ方のとや
ちとららでも應、拷問の辰の刻より暮るまでしすばぬ

又人のもとがめん 為明のうたせらぬとらるる
面敷とらめせり 侍もよ歌の名らるるく智殿がぬどや
老の目とぬぐひ日敷と人敷と意と派らるる空摸の
ら義かりすして空摸の起定の起定なり

第十八意の句は事

意の句のい古式は用ひおつこのゆへに嫁娘か
とせ良傾城の文字は名目して意の中は
いとおあしう書句はらるる意は文字
ふんおあしう書句はらるる意は文字
の意と一句して換るやとらるる意は風



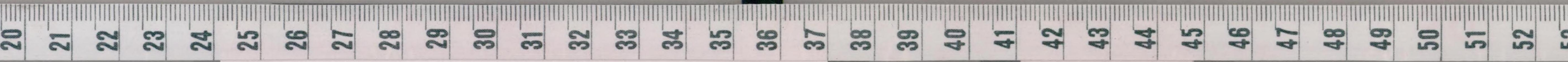
句の字は意なりて此の句も亦此の字なる意句なる事
亦此の字なる意句又百なりて亦此の字なる意
句百なりて亦此の字なる意句なり

第十九切字の傳りたる事

切字此の諸抄より傳りたる事
世に傳りたる推量あり大傳りたる事
亦此の字なる切字事と我家より於義なり
此の傳書に初より證ありてもいふ所の道
理もを得たり其外三段切二字切杯
も今此の傳りたる事なり是れ也

家に沙汰ある事

二字切 山雲の底に水は月
三字切 子供等より顔はみれん
三段切 梅より葉まりの空はけ
或は素堂の鎌倉の吟よ目に青葉山子規
初纏より目には眼耳目の三段は
いふ所ありたる事此の句は三段と初
る事なりて二字切三字切の句の中より
と云ふ事なりては



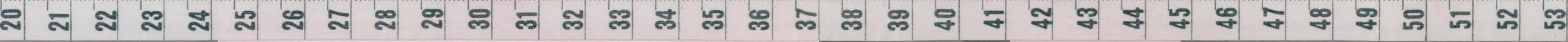
三字曰志しと切きし所なり我を鷺鳥の目
のいほや暮ぬく鳴鶴とまふ句かしの字よ
てきくしむとや此字切字よ何んばは類の
何んば有て諸抄よれと字の字の字の字
義好一切字の百なりても切ぬのいほや
夕白や秋の色くは飄う如らふ句の
乃夕白や秋の色くは飄う如らふ句の
のくしむとや此字切字なりは類類多
うんた

猫の意やむしん園北勝月

是は中の切きふたり止むとんまれば
く園の月東かく中よはは疎しとる句
法なりうらりたる人辰初瀬とる人あり
奇の如なり

くよ家法うらせと我と奉志

くよを撰抄切きふたり一句よは地地
差別ゆらぬなりけはゆらの切と家法の
發ゆしと地門よ白ひてせんくすむとん



かり挨拶の切人ゝ家と買せて我々年々々々世旅の
代々宙のゆきゆり人々家と自化と對世旅と耕人
人の付置さるや旅の望横と對對もろく切り

第二十指合之事

佛借よこし合此事と世旅の草化
顔よこし人魚と少許の形をた
何果されし物と一とたれり言ふと
随分ゆきゆり一とたれり言ふと
こし合後のせんた形と一指合の
と變化の道理形と世其れはた

變化のふ身を一祭世よこし合を嫌の
掟り善の法式はけいひとく知るべき

佛の式の中筆^{ごん}とせりゆり好む草はた埋本と格われ
と成して我負享式と定むりこし合とてよけたり
を嫌とる家物の事なりテトでカトガの法^{せう}濁りながら
法濁りのていふものあり二百をたり式はたをい免す
たりたまひの家おも草本身歎器の食服のたより
居^{まゐ}其場等体と作らるる三句を用と用とる三句を辨^{べん}れ
二百を支辨^{しべん}之活中も作れ動靜り辨異辨の差別有
房とこれり引手とめくは辨してとてとてとて
是ら二句をよす人けり後養と人入れし門の
澄^{じやう}えり屏風とある女共陽^{やう}敏^{びん}の辨^{べん}の善^{ぜん}子^し阿^あ下^げ



小水門の溢る用とて、侍人の体なり、終句作ようどき、うらみ、湯敷
いりて、其場あり、句作、静あり、後て、おう、よ、翁の附て、後の
教と、た、ま、れ、う、ら、ま、れ、た、の、動、静、の、他、と、透、過、さ、ん、び、う、た
の、内、外、の、二、句、ま、ぬ、る、下、異、静、と、う、の、梅、梅、の、押、腰、也、句、の、半
よ、幽、の、庭、馬、と、ま、の、句、ま、り、ら、り、變、り、そ、の、越、も、許、ま、り、ら、り
又、一、盃、よ、山、の、や、く、語、語、の、耳、よ、の、ら、ぬ、二、句、ま、ぬ、さ、て、そ、の、
名、の、春、日、よ、喜、れ、日、終、兼、よ、麻、の、附、て、さ、る、一、の、だ、井、紙、の、き
ら、ら、り、す、で、て、つ、け、ら、う、の、の、二、句、ま、附、ら、ぬ、も、の、う、ら、ら、
し、と、ま、き、し、く、式、の、二、句、ま、り、屏、風、よ、春、風、と、静、の、り、
を、お、け、く、の、二、句、ま、附、ら、ぬ、お、う、も、ゆ、ら、す、で、さ、れ、も、春、風、と、ら
山、の、り、個、名、の、の、や、あ、せ、寒、み、も、ゆ、ら、も、の、如、ま、れ
ぬ、い、け、れ、た、く、だ、春、風、よ、ぬ、ら、り、あ、ま、の、け、り、う、如、ま、ま、り、
二、句、ま、り、り、春、の、見、返、よ、さ、れ、い、み、の、け、れ、の、許、ま、り、
初、ま、り、入、法、義、乃、道、理、は、知、り、一、卷、の、變、化、は、知、り、靜、動、静

音聲同辨異辨のよけとさばきて、語語の拍子に、おの、け、お、答
も、ま、嫌、も、う、て、新、白、の、法、よ、た、が、ま、ん、の、た、ら、の、事、の、明、如、ん
さ、會、同、く、よ、ま、ま、嫌、の、何、も、の、と、さ、ぬ、變、化、の、名、の、り、の、を、
お、て、法、よ、如、の、ゆ、ら、ぬ

第二十一 卒倚乃春也事

卒倚の春と春より腕と

け、後、句、は、落、え、と、志、れ、を、後、句、の、身

三と平句との差別法を知るなり

後句の二句は中よ曲節なりとの

何りけ句よ花の曲して春の腕と

節や曲名の二つは此は此の強淨

場理も知り下

辛倚乃出と春此東眺とく

是ハ才三此とゆかりは年自りの重き

西と雲の纏とらふ節なり

辛倚の松と喜此おえ渡して

是ハとく春乃事此のみ曲もたぐ

亦節もたぐたものなり

此ハ自然せらんに昔とゆかりは沙汰

何れもまの初心の論なりと眺と

と省と眺ととらふ事ハ此と変

定乃詳とてむより雲の面白と変定

すれと侍題乃褒貶乃此と奇も

嬌ハのりりさ波やゆのハは此とめて

比良の高根のむと見此此と誦る

と花より辛倚此雲乃眺とて此也

流るんとも変定の中乃変定たり感と

して昔りのゆい

第廿式真此句に書此句後この

昔武北涼川よそ真よこびの句後る夏
つり其時も知る人掃たねむ今さら
附合の格式ともさうた

並に柵本も真此句後る夏

考此居るむの賦屋さうありあり

是にお句ぬをさひつりそ奇の前書と
見さるよりひくひありたりと賦さる
かりは顔にお句此句後起してあはる

よりさひ好とさる提おは真さうまの
かり武をさ句と軍書も能程さ乃母
しみ洋瑠理おの相ももみ取く後如
さる風情あり

高道う櫃の少事とさうぬ

片に山乃目後見るさ

是にお句の文章より古代の奇はさ
と後如して月後るさうまをさ
好り武の平句の武もたさうにけ

第九之霄 寫れぬ事

何奇仙乃七句目と霄圍れ句部

よ三句此中よ月次と人をもる如り

霄圍れ何より神乃宮邊

如り秩れ風其のれ何

八月の夜ゆりうた小幡中

起霄圍れ月八次と一おらん殊り

よる一十句目の起あは起て母念られ

と三句此と終よもせて八月は月の字

よて見度一の母此字の何らひるや

是は一を此級とも如り霄圍れ月

よの母よす一或や三句とる合て月

乃字の働く如る也

青雲の月やぬと小萩風の三字の何らひて中終れ
よ志一ばも青雲の月やぬと小萩風の三字の何
よ縁の産物又かてよおはの會終て月と成る也一今
とん三句とる合せて一と二と三の月と成りて月次
の月の字は何らひて青雲の月やぬと小萩風の三字の何
らひて二句の何らひて月と成りて一と二と三の月
はもいん妻の月と成りて演一案



第廿四名所々雑乃白蛇事

名所乃白蛇の事とて雑乃白蛇の事とて
名所乃白蛇の事とて雑乃白蛇の事とて
名所乃白蛇の事とて雑乃白蛇の事とて
名所乃白蛇の事とて雑乃白蛇の事とて
名所乃白蛇の事とて雑乃白蛇の事とて
名所乃白蛇の事とて雑乃白蛇の事とて
名所乃白蛇の事とて雑乃白蛇の事とて
名所乃白蛇の事とて雑乃白蛇の事とて
名所乃白蛇の事とて雑乃白蛇の事とて
名所乃白蛇の事とて雑乃白蛇の事とて

て又源氏物語よその事とて雑乃白蛇の事とて
雑乃白蛇の事とて雑乃白蛇の事とて
雑乃白蛇の事とて雑乃白蛇の事とて
雑乃白蛇の事とて雑乃白蛇の事とて
雑乃白蛇の事とて雑乃白蛇の事とて
雑乃白蛇の事とて雑乃白蛇の事とて
雑乃白蛇の事とて雑乃白蛇の事とて
雑乃白蛇の事とて雑乃白蛇の事とて
雑乃白蛇の事とて雑乃白蛇の事とて
雑乃白蛇の事とて雑乃白蛇の事とて

雑乃白蛇の事とて雑乃白蛇の事とて
雑乃白蛇の事とて雑乃白蛇の事とて
雑乃白蛇の事とて雑乃白蛇の事とて
雑乃白蛇の事とて雑乃白蛇の事とて
雑乃白蛇の事とて雑乃白蛇の事とて
雑乃白蛇の事とて雑乃白蛇の事とて
雑乃白蛇の事とて雑乃白蛇の事とて
雑乃白蛇の事とて雑乃白蛇の事とて
雑乃白蛇の事とて雑乃白蛇の事とて
雑乃白蛇の事とて雑乃白蛇の事とて

(11)



世用かりとれ龍師の句に奇書あり軍書あり
世心ありとれ透遠なる下一これありはれはつり
松の香自に香句の他は多しその直法かりのことも得と
片とと印をせて片を付けてはれとす川と云風情あり
次の句も杖突坂とらへ多しおのるるは落馬はせぬと
と一他の一曲とて雅の句なり此は須戸明人の句は蝸牛の
角上の五百りの圃の句とてく勝負と変せんは人る其
是の果は身事次在周の句とて海氏と須戸明人の近
きは這とるはぐいふと趣向の蝸牛の句とて角
ありりけよと莊子の句とて一は須戸明人の句は西浦の美景
いつまもにけとての情を蝸牛と抱して真せらるり
志れど蝸牛は多季好むは句の用とておれど書季は
辨とせん佳境と作らん他は雅の辨とて人好り
又無季の格は年と春と秋の他とてり句曲とてた核
り

ともいひけて年とまりあるはえりは歳旦かり句曲
書季とてりて其季とてきとゆれば他は書季の格とて
かり又四季の格とて七浦や一字の題を一字かりは龍師
湖南の吟かりは脇書ありとてとれは格は句他書大
して其季との脇と附ても合ふる書の句を
句法かり

第廿五假名遣は事別書之



80

甲文庫



14222

享和二年壬戌二月吉旦

蕉門僣借書林

京都

額田正三郎

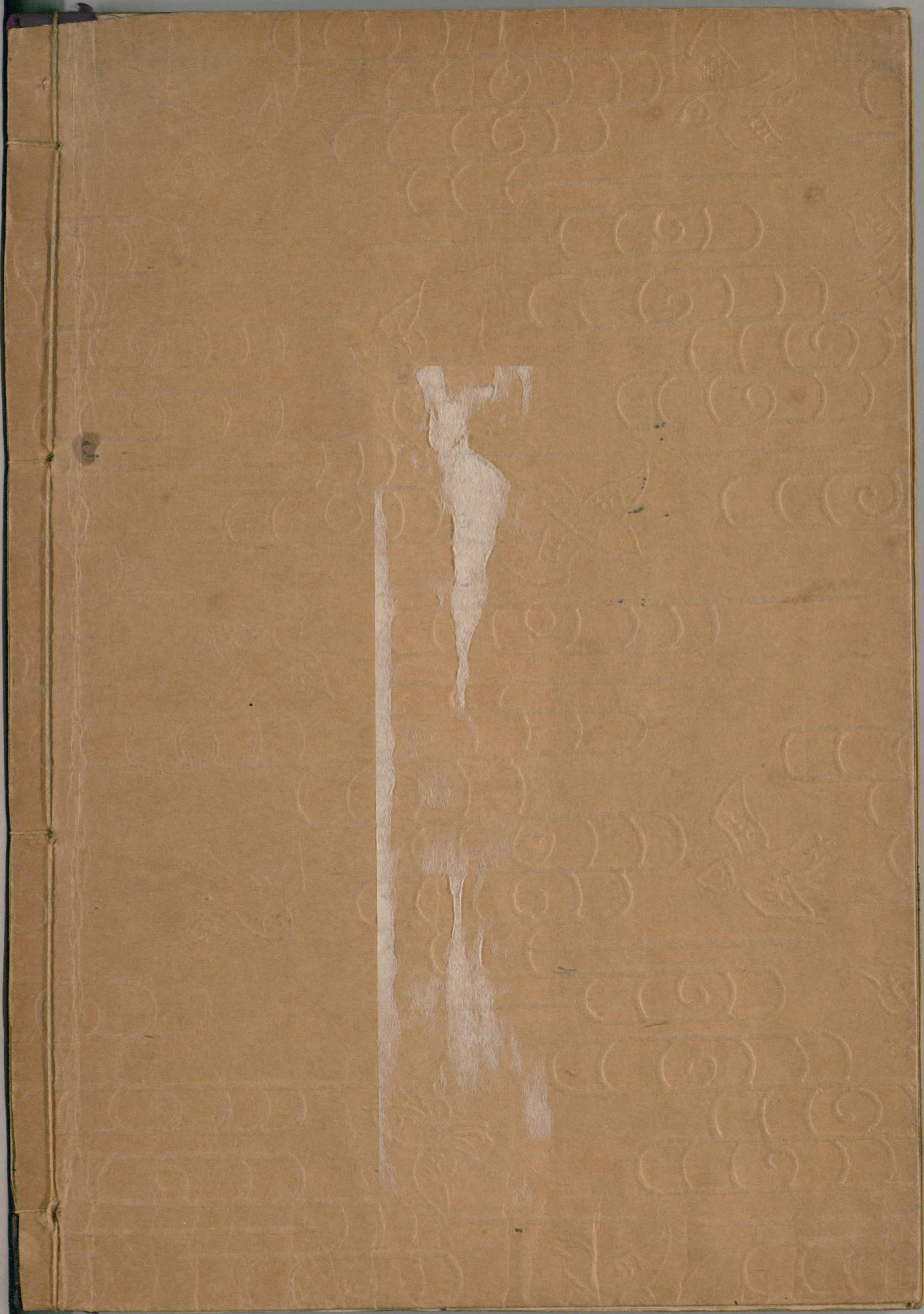
江戸

西村源六

大坂

奈良西長寺坊

同 為三郎



国立国会図書館

タイトル『白馬奥義解』 請求記号 863-173

ガラス使用